

一戸務より周作人宛書簡5通：附：「父・一戸務と周作人先生」

一戸， 渡
会社員

中里見， 敬
九州大学大学院言語文化研究院：教授

顧， 偉良
元弘前学院大学文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/7392970>

出版情報：言語文化論究. 55, pp.47-66, 2025-10-29. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



正誤表

『言語文化論究』第 55 号に掲載の、一戸渡・中里見敬・顧偉良「一戸務より周作人宛書簡 5 通——附：「父・一戸務と周作人先生」」において誤りがありました。

57 ページの注 11 を、以下のように謹んで訂正いたします。

(誤)

注 11 日中文化交流協会による第 1 回日本作家代表团（青野季吉、久保田万太郎、宇野浩二、堺誠一郎ら 11 名）が中国人民对外文化協会の招聘により訪中し、周恩来総理と会見したのは 1956 年 10 月。よって、この書簡は 1956 年執筆と推定される。『日中文化交流』No. 716、2006 年 3 月 23 日参照 (<http://www.nicchubunka1956.jp/>)。

『周作人日記』1956 年 10 月 14 日に「紀生同一戸君來訪、以《狂言選》一冊贈之」、11 月 22 日「得對外文化聯絡局轉來谷川十月十日信、一戸同十五日、風呂敷一枚。寄一戸航空信。

（『周作人日記』第 7 冊、483、492 頁）とある。方紀生に伴われて來訪した一戸に対して、周作人は前年 1955 年 4 月に人民文学出版社から周啓明訳として刊行した『日本狂言選』を贈った。翌 15 日には一戸からの礼状を對外文化連絡局から受け取り、ただちに航空便で日本宛に返信している。代表团はまだ北京に滞在していたが、通信の自由はなく、当局の監視下にあったことがわかる。

(正)

注 11 日中文化交流協会による第 1 回日本作家代表团（青野季吉、久保田万太郎、宇野浩二、堺誠一郎ら 11 名）が中国人民对外文化協会の招聘により訪中し、周恩来総理と会見したのは 1956 年 10 月。よって、この書簡は 1956 年執筆と推定される。『日中文化交流』No. 716、2006 年 3 月 23 日参照 (<http://www.nicchubunka1956.jp/>)。

『周作人日記』1956 年 10 月 14 日に「紀生同一戸君來訪、以《狂言選》一冊贈之」、11 月 22 日「得對外文化聯絡局轉來谷川十月十日信、一戸同十五日、風呂敷一枚。寄一戸航空信。

（『周作人日記』第 7 冊、483、492 頁）とある。方紀生に伴われて來訪した一戸に対して、周作人は前年 1955 年 4 月に人民文学出版社から周啓明訳として刊行した『日本狂言選』を贈った。1 ヶ月以上たった 11 月 22 日ようやく、10 月 15 日付の一戸からの礼状を對外文化連絡局から受け取り、ただちに航空便で日本宛に返信している。谷川徹三や一戸から周作人宛の書簡が 1 ヶ月以上も当局に差し止められていることから、日本作家代表团は当局の監視下にあり、周作人にも事実上、通信の自由がなかったことがわかる。

2025 年 11 月 5 日

中里見敬